51th
東京城東ロータリークラブ週報
国際ロータリー第2580地区

2017.　2.　27　　第2374回例会

感謝の心で 奉仕と親睦を

東京城東ロータリークラブ会長　細谷　貞治

例会日　毎週月曜日　12:30 ～ 13:30
例会場　〒 130-0013　墨田区錦糸1-2-2　TEL 5611-5511
東武ホテルレバント東京
事務局　〒 130-0013　墨田区錦糸1-1-5
TEL 5637-4605　FAX 5637-4611
事務局　天尾　文（伊藤）
E-mail　jyoto@club.email.ne.jp

会　長　細谷貞治　副会長　阿部　豊
幹　事　兒玉正行　副幹事　江波戸健治
会報委員長　池永憲明

R I 会長
ジョン F. ジャーム
第2580地区ガバナー
上 山 昭 治
第2580地区幹事
田 中 永 二
ガバナー補佐：鈴木秀史
(東分区担当)
東分区幹事　：瀧澤一郎
東分区副幹事：鈴木正名

人類に
奉仕する
ロータリー

本日の卓話

「　北斎の住む町　墨田区　」

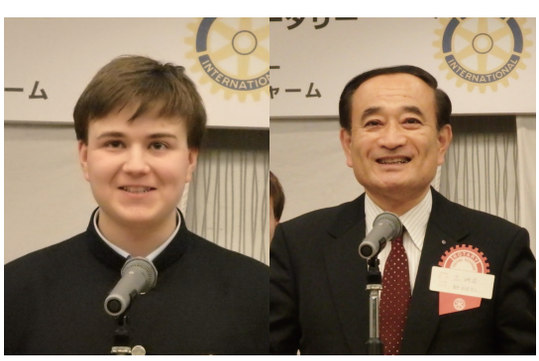
墨田区役所　区民活動推進部長
鹿島田　和宏　氏

2017/2/20（月）
「 個のやる気を引き出す 」
日本水泳連盟上級コーチ
髙 城 直 基 氏

ニコニコボックス

○髙城様、本日の卓話よろしくお願いします。
細谷貞治君・兒玉正行君・阿部　豊君
渡辺孝至君・篠田泰彦君・伊藤国雄君
江波戸健治君・村上愼吾君
山﨑富士夫君・池永憲明君
○ミシェル君、元気にエンジョイしてますか？
水谷　彬君
○お祝いを頂いて。　伊藤健一君

小計￥38,000.-　累計￥1,692,000.-



青少年交換学生 ミゲル君
ホストファミリー　辻様

2017年2月20日 例会報告

点　鐘	
ロータリーソング	『我等の生業』
ゲストスピーカー	1名
ゲスト及びビジター	2名
会員出席状況	48名中36名(出席率75.00%)
前々回訂正出席率	100%

- 来月3月の受付当番 -
田島君/中田君/葉佐君/宮﨑君/村上君

次回の卓話

「　本所と鬼平　」

大鳥居 武 司　会員

内 容 充 実 の 為 に、皆 様 か ら の 投 稿 を お 待 ち し て お り ま す ！

▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

ＲＩニュース：2017.1.11

▲△▲△▲△▲△▲△▲△▲△▲△▲△▲△▲△▲△

最前線での教育―②

ナイジェリアでは大学長とロータリークラブが教育と食糧の配給を通じてボコ・ハラムと闘っています。

2014年の春には新たな試練が起こりました。ボコ・ハラムが北部の町を襲撃し、家々を焼き払い、少女たちを奴隷として連れ去るため、人びとが避難してくるようになりました。

2014年6月までに、ヨーラには5千人の避難民がいました。大学、API、ロータリークラブが協力して募金活動を行い、避難民が農作物の種を買い、子どもの学費を払えるよう支援しました。

「最初の5千人を支援した時点で、これだけ大勢の人に対応したのだから問題を解決できたと思いました。ところが7月には5千人が2万人になり、9月にはその10倍にまで膨れ上がりました」

ヨーラには人があふれていましたが、政府は何もせず、国際社会の代表者はまだ現場に到着もしていませんでした（そしてようやく到着した彼らの対応は「不十分で誤った対象に向けられていた」と大学の報告書に記されています）。そこでエンサインさんと仲間はさらに募金を集め、APIを通じてヨーラ市内とその周辺にいる国内難民のための食糧と救援物資を購入しました。米、豆、トウモロコシ、食用油、毛布、砂糖、塩、パスタ、アズキモロコシ、石鹸などです。交通費として少額の現金も渡しました。配給所には数万人が列をなしました。

そうしている間にもボコ・ハラムは迫っていました。2014年10月には戦闘員がムビを制圧し、難民が堰を切ったように大流出しました。2015年初頭までに推計40万人の難民がヨーラに住み、地元住民はボコ・ハラムが大学の門にまで迫るのではと恐怖を募らせるようになりました。

一大プロジェクトとして、大学、API、ロータリアンは、イスラム教、キリスト教、その他各宗教の指導者たちと協力し、飢えに苦しむ人が出ないように活動を続けました。「自分たちが何をしているのかを考えるひまなど誰にもありませんでした。ただひたすら募金を集め、食糧を仕入れ配給し、人々の世話をし続けました。6～7カ月の間、通りには数千人の人があふれ、ほぼ毎日食糧の配給をしました」

2014年11月、ナイジェリア軍がムビを奪還し、ボコ・ハラムを北部へと押し返し始めました。難民もヨーラを離れ故郷へ帰り始めましたが、彼らを待っていたのは焼け野原だけ。病院も、学校も、銀行も、農場も破壊し尽くされていたのです。そのため、APIは目標を拡大して和解にも取り組むことになりました。「ルワンダでの経験から、社会構造の再建と学校の再建が重要だと分かっていましたが、起こってしまったことに向き合うための方法は市民が自ら見つけ出さなければなりません」

1年前、エンサインさんとAPIのスタッフは車でミチカへ向かいました。ボコ・ハラムに占拠されていた町です。APIは住民を、若い男性、若い女性、支配層と伝統的指導者、自警団を名乗る人びとと襲撃をした人びと、といったグループに分け、それぞれが自らの経験を語り、不満や憤りを表に出せるようにしました。

「初め、宗教指導者は『ムスリムは友人であり憎しみはない』とか、『司教に対して悪い感情は持っていない』と言っていましが、少し掘り下げると、お互いに激しい憎悪を抱いていた事がわかりました。イマーム（イスラム教導師）とキリスト教の司祭がいましたが、最後には互いに歩み寄って抱擁できるようになりました。大の大人が抱擁なんて馬鹿げていると思われるかもしれませんが、これは国民にとってとても重要な、大きな一歩だったのです」

現在、ヨーラでは少女達が勉学に励んでいます。その内二人が故郷に戻って結婚し、もう一人は退学しましたが、24人がAUNに残っています（10月にはさらに21人の少女がボコ・ハラムから解放されました）。AUNにいる女子生徒のうち6人が大学へ進学し、コンピューターサイエンス、ソフトウェアエンジニアリング、環境科学などを学んでいます。「教育は私に翼を授けてくれます。闘う力、声を上げ主張する力を」と生徒は言います。

しかし、戦争と戦争が生み出した問題が遠ざかる事はありません。今も散発的に攻撃があり、市場で自爆テロも起きています。故郷に戻った難民は、以前よりもさらに困窮した生活に直面し、育てる農作物がなく、植える種もなく、食べる物もない状況です。国際救援委員会の推計では、500万人が緊急食糧支援を必要としており、エンサインさんは史上最大級の飢饉になるのではと危惧しています。

そのため、大学、API、ロータリアンは地域社会のニーズに応えるため活動を続けています。学生副部長のベロさんはこう言います。「大学が今日の姿にまで発展できたのは、エンサインさんの献身と斬新な手法、そして社会奉仕プロジェクトのおかげです。成果を挙げるには、全員が協力して前に進まなければならないのです」